

なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.21 Jun.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、愛知県の知多半島と渥美半島に囲まれた三河湾の湾奥にある「蒲郡（がまごおり）」。

多くの産業と深く結びつき、時代の変化の波を強く受けたこの地の干潟や浅海で、今もなお、昔と変わらず湾とともに暮らす漁師さんらをライターの新美さんが訪ねました。

なぎさシリーズ No.17

三河湾の環境回復に挑む漁師たち

新美貴資

三河湾とともに生きる沿岸の人々

愛知県の知多半島と渥美半島に囲まれたなかにある三河湾。温暖な気候に恵まれた遠浅な海では、全国一の生産量を誇るアサリをはじめ、イシガレイ、クルマエビ、カサゴ、シャコ、ワタリガニなど、一年を通して様々な魚介類が獲れ、ノリ養殖も盛んだ。

湾奥の東側、豊川の河口に広がる六条潟は、大量のアサリの稚貝を育む重要な干潟で、三河湾におけるアサリ漁の生命線となっている。漁業の他にも、風光明媚なことから沿岸は観光地として知られ、自動車や



機械などの輸出入の貿易港もあり、三河湾は多くの産業と深く結びついている。時代の変化の波を受けて姿は大きく変わったが、今も漁で暮らす沿岸の人々とともに生き、海からの恵みを与え続けてくれている。

今回訪れたのは、三河湾の湾奥に面した蒲郡市。市内にはいくつかの温泉地があり、ハウスみかんの生産量は全国でも有数。織物や繊維ロープ産業が発達している地域で、水産業も早くから発展を遂げてきた。

地元の漁業者たちが、アマモの種採りを行うというので、蒲郡駅を降り立ったのは

	都道府県:	愛知県
	地域協議会:	愛知県漁場環境・生態系保全対策協議会
	活動組織名:	蒲郡市漁場環境保全協議会
	協定先:	蒲郡市
	構成員数:	48名
	対象資源:	干潟、藻場
活動内容:	計画づくり、モニタリング、アマモの播種、砂泥の移動防止、機能低下を招く生物の除去(腹足類)	

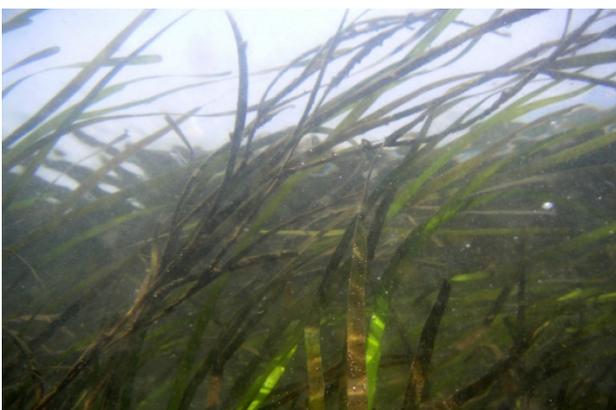


6月の中旬。晴れ渡る青空の下、朝の澄み切った空気をいっぱい吸い込む。期待を胸にして、さっそく三谷温泉街の地先に広がる海岸へと急いだ。

広がる海の草原

藻場と干潟の維持・回復に取り組んでいるのは、地元の漁業関係者らで構成する「蒲郡市漁場環境保全協議会」だ。目的の海岸に着くと、降り注ぐ太陽の光が青い海を一面に照らしている。浅瀬では、すでに種採りの作業を始めている漁業者の姿も。はやる気持ちを抑えながら、あわてて胴長に足を通し、海辺へと向かった。

この日、アマモの種採りに参加したのは、同協議会のメンバーである蒲郡漁協、三谷漁協の漁業者と各漁協の職員、県立三谷水産高校の生徒たち。さらに、市内にある県水産試験場からも多くの職員が加わり、



40人ほどが集まった。

砂地の海の底をゆっくりと踏みしめて、10メートルぐらい進むと、点々と生えるアマモの姿が。20メートルも歩くと、あたり一帯はアマモが生い茂る海の草原に変わる。穏やかな海面には、まるでビロードの絨毯のように、長さ1メートルほどのアマモがゆったりと波打っていた。

種採りを通して海と対話

腰をかがめてゆっくりと移動しながら、手を休めることなくアマモの種を採り続ける漁師たち。



「昨年よりも種は少ないね」。近くで作業をしていた同協議会会長の稲吉善伸さんがつぶやく。それでも種をつけた枝を見つけては、どんどん摘んでカゴへと入れていく。

これまでの経験から、種は枝の先のほうに実ること、細い葉の枝についていることなど、もう一人の漁師さんが教えてくれる。

自生するアマモが毎年種を実らせるこの海岸は、藻場の生育にとって良い条件がそろそろ、貴重な自然の干潟だ。

しばらくすると、三谷水産高校海洋資源科環境コースの3年生18人も加わり、海辺は一気ににぎやかさを増す。同高校の生徒も、毎年この時期に行われる種採りに参

加している。

ウエットスーツを身につけて、海のなかを元気に飛び回る生徒たち。現場での実習授業はいつも人気で、みんな表情が生き生きと輝いている。

「色が白い枝をたぐると種がありますよ」。将来は海の生き物に関わる仕事がしたいという男子生徒が、種のついた枝の見つけ方を教えてくれた。

アマモの種を採るのは初めての体験。枝の途中の部分から手をすべらせて探っていくと、微かなおうとつを感じる。引き抜いてみると、1ミリぐらいの小さな種が一列



になってびっしりと詰まっていた。

種のつき具合や実る時期は、その年の海の状況によって変わる。黙々と種を採る漁師たちの姿は、海と対話して、変化の声にじっと耳を傾けているようにも見えた。

種採りは人手が頼り。多くの参加者によって、来季に芽を吹かすたくさんの種が収穫され、この日の作業は2時間ほどで終わった。

種のついたアマモの枝は、近くで待機する漁船へと集められ、タマネギ袋のネットにぎゅうぎゅうと詰め込まれる。その後は、一ヶ月ほど海中に吊るし、種が成熟して枝から分離したら、水産試験場で冷蔵保管。



選別された良質な種が、11月に市内の形原、西浦地区にある2ヶ所の人工干潟でまかれる。

アマモ場の再生活動は失敗の連続

アマモの種を採り終えた後、蒲郡漁協の西浦支所で同協議会会長の稲吉さんが、取り組んでいる漁場の環境保全活動について説明してくれた。

地元出身の稲吉さんは、脱サラ漁師。県内でサラリーマン生活を送っていたが、35歳の時に父親の後を継ぐことを決意し、漁師に転向した。以来、三河湾でエビ類や貝類を獲る小型底びき網漁を続けて15年になる。

蒲郡では、沖合底びき網や小型底びき網、刺し網、小型定置網、採貝など、様々な漁が営まれている。漁場も三河湾を中心に、その湾口から外へと広がる伊勢湾、さらに





「蒲郡メヒカリ」目が光る・メヒカリ？容姿に反して味はとても上品。唐揚げが最高！左上の絵はマスコットの「ぴか丸くん」！

は渥美半島の外海まで広範囲に及ぶ。なかでも沖合底びき網漁は、県内では蒲郡市だけで行われている漁業。漁港の魚市場には、メヒカリやニギス、アカザエビといった深海に棲む独特な魚介類がならび、地元を中心に消費され、地域の魚として親しまれている。

このように多種多様な漁が行われる蒲郡だが、近年は漁獲量の減少などから浜はかつての活気を失い、西浦支所でも漁船の数は最盛期の10分の1まで減ってしまった。

三河湾を漁場とし、長年海を見続けてきた稲吉さんは話す。「親父が船に乗っていた頃は、港をすぐ出たところで漁ができた。私が後を継いだ頃になると、魚は湾口の狭いところでしか獲れなくなった。三河湾は閉鎖的な海で、水が入れ換わるのに2ヶ月もかかる。夏場の暑い時期になると、海底付近の酸素がなくなって、底にいる魚やエビ、カニや貝がみんな死んでしまう。昔は不足した酸素を干潟や藻場が供給して、補っていた。埋め立てなどによって干潟が失われ、浅瀬に生えていたアマモも姿を消してしまい、蒲郡の海から魚や生き物

がいなくなってしまった」。

悪化した海の環境を改善して資源を増やし、漁業の衰退に歯止めをかけようと、稲吉さんら蒲郡漁協の青年部では、10年以上前から、失われた藻場と干潟の再生に力を注いできた。

平成11年度には西浦地区、13年から15年度には形原地区で人工干潟が造られたのを機にアマモの移植を試みる。当時はまだ移植する方法も確立されておらず、「植えたら全部が流されてしまう」。アマモの根を粘土やカップを使って固定したり、試行錯誤を重ねるが、活動から7、8年は失敗の連続だったという。

そのような状況のなかで、平成21年5月に蒲郡漁協、三谷漁協の漁業者、各漁協職員、三谷水産高校、民間企業2社からなる「蒲郡市漁場環境保全協議会」が設立。これまで取り組んできた活動の母体となる組織が整い、活動内容もより具体化する。

同協議会が発足して、アマモ場の再生も大きく進む。種をサンドイッチのように上下からはさんで浅瀬に設置するゾステラマットという資材を新たに導入し、人工干潟での発芽と育成が可能になった。マットへの種付けは簡単にできることから、昨年秋の種まきでは、地元の小学生を漁港に招い





「再生したアマモ場に稚魚がすむようになった」

て作業を体験してもらい、交流を深めた。

これまでの経験から、アマモの生育には、粒の粗い砂地が適していることもわかった。毎年、種をまく地点も、過去に良好な結果が現れているところに絞ることで、アマモ場は着実に広がっている。

藻場で実施したモニタリングでは、メバル、カレイ、セイゴの稚魚やイカの幼生、アサリ、バカガイなどが見つかる。人工干潟で芽を吹いたアマモの草原は、魚介類の産卵・育成の場として、しっかり機能を発揮していることが確認できた。

活動は第2のステップへ

これまでの活動を振り返り、「アマモの取り組みから資源の増殖へ。活動は第2ステップに入った」と話す稲吉さん。

蒲郡漁協の青年部では毎年、西浦地区の人工干潟にワタリガニの種苗を約10万匹放流している。一度は絶えてしまったというワタリガニの資源だが、現在は漁獲も安定しており、藻場と干潟が育成の場としてうまく働いているのではと考える。

この他にも、漁獲の対象であり干潟の生き物を代表するアサリを食べてしまうため間引いているツメタガイについて、有効利

用を図ろうとレシピを作成。食用化の普及にも力を入れている。

藻場と干潟の維持・回復に取り組む同協議会の活動は、地元の漁業関係者の協力と一般の人々の理解を得て、さらに輪を大きく広げている。

今回の取材で、三河湾内はすべてが一つにつながった運命共同体であるということ強く感じた。地先の海を豊かにすることは、三河湾全体の再生につながる。何度も失敗しながら、あきらめることなくアマモ場の再生に挑戦し続けた、稲吉さんをはじめとする同協議会のみなさん。その活動からは、環境が良くなれば、漁業は必ず復活する、というまっすぐな思いが伝わってきた。蒲郡の漁師たちの挑戦は、これからも続く。三河湾の湾奥で芽吹いた漁場の環境を守る活動は、しっかりと根を生やし、さらに大きくなろうとしている。



～ 著者プロフィール ～

新美貴資 (にいみたかし) 氏
フリーライター
水産ジャーナリストの会会員



伊勢・三河湾を中心に漁業・漁村の現状と活性化に向けた

取り組みの取材を展開。また、東海エリアにおける地産地消の取り組みの情報発信などを手がける。

技術をみがき・学ぶ「技術講習会」の開催

環境・生態系保全対策に参加する・検討されている方々を対象に、環境・生態系保全活動の技術をみがく・学ぶための「技術講習会」を開催します。

現在、各地域で取り組まれている具体的な保全活動の内容を見て・体験して・学ぶ研修を行います。ご応募お待ちしております。

技術講習会の会場及び開催日程の予定

干潟	山口会場	7月14～15日
藻場	大分会場	7月26～27日
干潟 浅場	三重会場	8月3～4日
藻場	北海道会場(予定・調整中)	10月頃
サンゴ	会場調整中	10月頃
藻場	三重会場(予定・調整中)	11月頃
ヨシ帯	茨城あるいは滋賀会場(予定・調整中)	11月頃

●詳細情報は！

ひとつみ.jp (<http://hitoumi.jp>)

トップページ「イベント情報」に掲載

●お問い合わせ

JF全漁連漁政部 環境生態系チーム

Tel: 03(3294)9616 Fax: 03(3294)3347 e-mail: k-support@zengyoren.jf-net.ne.jp

●干潟・浅場・ヨシ帯・サンゴ礁講習会申込窓口：株式会社 水土舎 吉永、野口、かしい

Tel: 044(922)3265 Fax: 044(922)9369 e-mail:yoshinaga@suidosha.co.jp

●藻場講習会申込窓口：社団法人 水産土木建設技術センター 安藤、石岡

Tel: 03(3546)6858 Fax: 03(3546)6826 e-mail: w-ando@fidec.or.jp

～ 編集後記 ～

今回取材したアマモの再生活動には、三谷水産高校の海洋資源科の3年生が参加していた。早々に作業を終えた生徒は、浅海で激しく遊んでいた。アマモの活動は、7年前から漁師や漁協、水産試験場の方などと取り組んでいるとのこと。生徒にこうした活動について話を聞くと、「アマモは三河湾にとって大切。また、こうして海に出て、体で海を感じる事がなにより楽しい」のだそうだ。進学校より、生の学習が学べる水産高校を選んだ生徒たち…非常にたくましく、頼もしく感じた。(吉)



海のゆりかご通信について

漁師さんは、お魚を私たちの食卓に届けるだけでなく、海の生き物を育み、そして海の環境を整える『なぎさー藻場・干潟・サンゴ・ヨシ帯ー』をまもっています。しかし、『なぎさ』は、われわれの暮らしが便利になると引き替えに、近年、減少しました。また、最近の温暖化などによって、その環境や生態系が変化し、更なる危機にさらされています。そうした中、漁師さんなどが行う藻場や干潟をまもる取組を国と地方で支援する「環境・生態系保全対策事業」が平成21年度からスタートしました。

海のゆりかご通信では、この対策事業に参加する『なぎさをまもる』漁師さんや市民の皆さんを紹介します。そして、一人でも多くの方々に身近な場所にある海の現状やそこで暮らす人たちの頑張りを知ってもらい、海や魚を身近に感じ、そして好きになってもらいたいと願っています。

